

ヲ雙指御簾まかりいたしまいらせ候はんといふ也、又女房あといふなり、
〔鳴門中將物語〕女うちなみだぐみて御ふみひろげてみるに、此くれにかならずとある文字のし
たに、をといふもじをたゞひとつ、すみぐるに書て、もとのやうにして、御使にまいらせけり、御文
もとのやうにて、たがはぬを御らんじて、むなしく歸たるよと、ほいなくおぼしめすに、むすびめ
のしどけなければ、あけて御らんするに、このを文字ありとて、御案あれども、御心もめぐらせ給
はず、さるべき女房たちを、少々めして、このをもじを御尋ありければ、承明門院に小宰相の局と
て、家隆卿のむすめの、さぶらひけるが申けるは、むかし大二條殿のち小式部の内侍のもとへ、月
といふもじをかきて、つかはしたりければ、さるすきもの泉式部のむすめ也ければ、母にや申あ
はせたりけん、やすくこゝろえて、月のしたにをといふ文字ばかりを書て、まいらせたりける、其
心なるべし、月といふ文字は、よさりに侍るべし、いで給へと心えけり、又人のめし侍る御いら
へに、男はよと申、女はをと申なり、されば小式部内侍も、上東門院にさぶらひけるが、まかりいで
てまいりたりければ、いよく心まさりして、めで思食ける、これも一定まいり侍りなんと申け
れば、御心地よけに、おぼしめして、したまたせ給けり、○中略藏人忍びやかに、此女侍るよし奏し申
ければ、嬉しうおぼしめされて、やがてめされにけり、○又見古今著聞集
〔めのとのさうし〕人のいらへの事は、上中下に女房はみつあるものにて候、おやしうのいらへは
をと申、はうばいたちあふなかはやとこたへ候、召つかふものなどには、ゑいとこたへ候、
〔貞丈雜記十五言語〕一人のよぶ時はいらへする事、いらへとは云なり今はあいと云、又はへい、杯と云、古は
左様にはいはざる也、猿樂の狂言に、大名などが太郎冠者とよべば、はあ、そいらへを云也、是は東
山殿の時代の風俗を、今に傳へたる也、又三儀一統に云、人をめすいらへは、男はよといらへ、女は
をといらへ申也とあり、